

パネルディスカッション

コーディネーター

佐藤 信

東京大学文学部国史学科卒業後、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官などを経て、東京大学大学院人文社会系研究科教授のち大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事を経て、現在「くまもと文学・歴史館」館長、横浜市歴史博物館館長、東京大学名誉教授。専門は日本古代史。

著書『古代史講義』等。

パネラー

吉村 武彦（明治大学名誉教授）

永山 修一（ラ・サール学園教諭）

和田 晴吾（兵庫県立考古博物館館長）

亀田 学（熊本県教育委員会）

佐藤・・

こんにちは。ただいまご紹介いただきました佐藤信でございます。この間、コロナ禍の中でこういった目の当たりに皆様とお会いするような機会が得られなかったということからすると、今日は天気の良い中、お運びいただきまして、どうもありがとうございます。すごく感激しております。また、今日は四人の報告者の方々に大変興味深いお話をしていただきました。鞠智城だけでなく、その前提となる古墳文化について、亀田さんの話、それから律令国家の辺要政策の中で鞠智城や肥後の国を位置づけていただいた吉村武彦さんのご報告、それから南九州の隼人と呼ばれた人たちとの関係が、肥後の国とすごく大きな関係があるということについて、色々な知見を教えてくださいました永山修一さんのご報告、それから和田晴吾さんの古墳文化全体のあり方の中でヤマト王権と九州地域の勢力との関係を丁寧に解き明かしていただいたご報告、いずれも大変興味深い内容でした。

今回のシンポジウムのテーマは、「古代の『辺要』支配と肥後・鞠智城」ということであります。鞠智城だけでなく、肥後国全体をどう位置づけるかということと、それがヤマト王権や律令国家の辺要支配とどう関係してくるのかという二つの大きなテーマがあるように思います。特に「辺要」については吉村さんのご報告にありましたように、律令国家ができて「辺要」という形で位置づけられるようになるわけですが、ヤマト王権の時代にも辺要という言葉で括つていいのかという問題もありますので、一応今回はカギカッコを付けました。律令国家としては、カギカッコなしでもいいのかと思いますけれど。今、私がお話したヤマト王権から律令国家へという過程は、ちょうど和田さんのご報告の中で、首長連合体制から中央集権的国家体制へというお話と、ちょうどパラルルになると思います。今回は、鞠智城の前提としての古墳時代も踏まえた上で、中央と辺要、あるいはヤマト王権と九州の在地勢力の関係、あるいはヤマト王権や律令国家の辺要政策の中における肥後の国の位置づけ、あるいは鞠智城の位置づけといった大きく二つのテーマがあると思います。そこで今日は、三つの章立てでお話を進めたいと思います。

まず一つは、古墳時代、ヤマト王権の時代の古墳から見たヤマト王権と九州の勢力との関係。その九州勢力の中には、独自の古墳文化もあります。例えば石人・石馬もそうですが、阿蘇のピンク石とか、石室の構造の特徴などがあって、そういったものと畿内を中心とした古墳文化のあり方との、関係をどうとらえるか。前方後円墳という墳形では統一性があるわけですが、一方で地域の特性

もあります。私は、ヤマト王権を中心とした古墳文化自身も、各地域のそういった古墳文化の特徴を取り入れながら、全体を構成しているように思います。そういったことも含めて、集権的・統一的なあり方と、地域独自色みたいな古墳文化のあり方をどう評価するか、ということを一冊目に議論したいと思います。

二番目には、辺要支配の中でも、特に永山さんの話にあったような、南九州の勢力と肥後鞠智城の關係について。これは今までの鞠智城シンポジウムの中でも中心的に触れることがなかったので、これについて議論をしたいと思いました。

三番目は、時間があれば、大陸・半島、東アジアとの交流の問題を取り上げてみたいと思います。

これは九州の古墳文化でも、高句麗系の古墳文化と連絡があるのではないかとという和田さんのお話がありましたし、江田船山古墳で出土した遺物、豪華な副葬品は百済系というふうにいわれております。私などは、江田船山の盟主となった豪族は、百済と直接交流を結んでそれらを獲得したのではないかと考えております。それ以外にも、文献資料でも、肥の君という氏族が有明海、あるいは八代海經由で半島と交流を進めていたという『日本書紀』などの記事もあるわけです。あと、お隣の筑後国の「磐井の乱」の筑紫の国造磐井は、高句麗、百済、新羅、加耶などの諸国が派遣してきた使節、倭国に派遣された外交使節を全部自分のところに誘致して、ヤマト王権の畿内には行かせなかったという記事が『日本書紀』にあります。つまり、対外関係を結んでいたということになります。そういった

た対外関係の問題に、もし触れる時間があれば触れたいと思っています。

最初は、主に古墳から見たヤマト王権と九州の地域的な勢力との関係について、和田さん、フォローしていただけませんか。

和田・・

古墳は、先ほどお話ししたように、基本的に重要な要素は、その形と大きさなのです。それについては、一定のきちんとした約束みたいなものが貫徹しているように思います。小型のものは間接的な形での規制があったかもしれませんが、そういうものでありました。埋葬施設の方は、一定の範囲の中では統一しようとする動きがあります。例えば、長持形石棺なんかは、畿内地域の有力豪族層の中では最高の格を持った棺だということで仁徳天皇陵古墳、最近世界遺産になりましたが、大山古墳ですね、あるいはその他の有力な巨大な前方後円墳ではみんな長持形石棺を用いています。九州で長持形石棺を用いているのは福岡県の月岡古墳だけです。関東では、群馬県の太田天神山古墳とお富士山古墳という二つの大きな古墳だけがそれを用いています。血縁関係があるなど限定された人たちのものについては非常に強い、共通の埋葬施設を用いようという意思があるのです。そうでないところは、割と地域に任せているというような格好があります。例えば、九州の有明海沿岸で造られていた舟形石棺の影響は、先ほど図で見ていただきましたように、日本海側に広がっていきまして関東にまで、あるいは東北にまで及んでいるというように、違った形のまとまりというのがあり得たのだらうと思います。それら埋葬施設をすべて一種類のものに統一していこうという動きは、古墳時代後

期の第二段階以降に非常に強くなります。だから新式群集墳というように書いておきました。六世紀中葉以降、大王から山間島嶼の有力庶民までが横穴式石室を造るようになりますと、極端に言いましたら畿内地域の中でしたら一尺単位ぐらいでランク付けするような造り方をしていますし、それ以外の地域でもみんな横穴式石室に統一されていきます。だから同じものを造りますので、造り方については、はつきりと差ができていたりして地域色が見えやすくなったということもありますけれど、みんな横穴式石室であるのには変わりはないのです。すべてを統一できればよかったのかもかもしれませんが、王権としての理想の形は実現しないままに飛鳥時代を迎えてしまいます。

佐藤..

和田さんも触れられた阿蘇のピンク石が、ずいぶん畿内の重要な古墳にも利用されているというのは、どういう政治的な関係と見たらよろしいでしょうか。

和田..

最初に使われたのは、奈良盆地の東側の現在の天理市から桜井市にかけての地域の古墳で、それほど大きな古墳には使われていません。横穴式石室に入りだしても同じです。それから滋賀県の甲山古墳と丸山古墳の家形石棺もピンク石です。連続的に同じ場所を使っているというのは、その初期の段階ぐらいでありまして、あとはもうポツポツとあるというような感じです。最後は、橿原市植山古墳という6世紀後葉から七世紀に入るぐらいの時期の方墳にも使われているというような形で終わっています。

佐藤..

これは畿内のヤマト王権を構成する豪族たちの中に、例えば九州地方の豪族と交流したり、あるい

はそれと同盟的あるいは従属させるような関係を結んで、そういったものをピンク石みたいなものを導入したということでしょうか。

和田・・

たぶん意図的に同じ地域のもものが運ばれてきていますので、そういう政治的な背景があったのではないかと考えます。石材は九州のものですが、形は畿内の的なもので、石棺を造る意思の主体は畿内側にあつたと思います。

佐藤・・

分かりました。ただ、今のような議論については、亀田さん熊本の研究者としていかがでしょうか。

亀田・・

もちろん、先ほど先生がおっしゃったように前方後円墳というのは、ヤマト王権によつて格付けられたもので、先ほど私も話をしました。古墳の大きさでは、南九州に大きな古墳が集中してあるというのは、やはり重要な地域であり強大な勢力が存在していたということがわかります。こちらから石材が運ばれている理由については、なかなか難しい問題でまだ考えがまとまっていません。

佐藤・・

あとヤマト王権と九州の古墳文化の関係というと、結構日向とか大隅側に前方後円墳がかなり分布しています。このことは永山さん、どう考えればいいでしょうか。

永山・・

はい、古墳の専門家ではないので、受け売りに近い話になってしまふのですが、どうも南島との関係があるのではないかと考えられます。弥生時代には九州西岸を通つて貝が運ばれていきますが、それが古墳時代に入ると東岸ルートに変わるのではないかとということが考えられます。日向とか、広い意味での日向です。現在の宮崎県から鹿児島県の志布志湾沿岸にかけての地域の首長との関

係を強めるようになっていくのではないかと。例えば『古事記』や『日本書紀』の中で日向出身の妃というのが何人も出てきます。これは妃を調べてみると、飛び抜けているのです。飛びぬけて遠い地域から妃を迎えるといったような、そういう記事が出てくるとのことと、関わるのかなという気がします。

佐藤…

永山さんの話にもありましたが、『日本書紀』などでは隼人が大王の側近として仕えているという記事が、だいぶ早い時期から出てきますね。和田さん、お願いします。

和田…

ヤマト王権は、非常に古い段階から全国の各地域の位置づけをかなりしっかりとっていたと思います。だから非常に地政学的に重要な場所に古墳を造っていくのです。古墳を造っていく場というのは一時的に軍事拠点にもなるのです。一定の人間をたくさん集めてきて共同労働させているわけです。そしたら鋤や鍬を刀や剣に変えたらすぐに軍隊になるわけです。だから、そういう意味では、権威の象徴でもありますけれど、明確な軍事的な圧力とも受けとることは充分できるような形のもんです。壬申の乱のときにも、近江朝が同じようなことをしていますし、『播磨国風土記』にもそういうのが出てくるわけです。だから、すごく重点的なところに造ったら、そこは続かないのです。朝鮮半島の伽耶地方の小国群なんかは、強力な王権がなくて、小さな国がいくつもあります。そこでは、国ごとに、四世紀中頃から六世紀中頃までずっと同じ所に王墓を造っています。日本ではそういうのはいくつもないので、すぐく王権にコントロールされている面があるように思います。

佐藤..

古墳が軍事的な施設でもあるというか、古墳造りが軍事動員とパラレルになるというのは、おっしゃる通りという気が致します。ヤマト王権の時代についても著書をお持ちの吉村さん、いかがでしょうか。

吉村..

古墳というのをどう考えるかということなのですが、実は和田さんと私は比較的思考方が似ているのです。一つは、前方後円墳の秩序に入っていることが、ヤマト王権の形成以前からだと私は思っているんですけども、どういう意味を持つかということが一つあります。それからもう一つはこういう場所に前方後円墳を造るかという、この二つがあります。特に前方後円墳の秩序については、これはやはり葬制儀礼ですから、王とも同じことをやるという、要するに大王がやっている葬制儀礼に自分も入るということは、やはり一定の政治的秩序の中に入っていくという意味だろうと私は思います。政治的文化といった方がいかもしれませんけれど。それと、もう一つ、どういう場所に造るかということですが、皆さんもご承知のように、オオヤマト古墳群、奈良盆地の東南部に出来まします。その後、奈良盆地の北の佐紀古墳群、そして馬見古墳群というのもありますけれど、それから大阪平野の古市古墳群と百舌鳥古墳群という五大古墳群があるわけです。そもそも五大古墳群をどう理解するかということです。古墳を造る場所に政治的勢力がいて、政治的勢力が強いところに古墳を造るということになりますと佐紀古墳群というのは佐紀王権というのですよね。佐紀王権という研究者が何人も言っていて、大著も出ているんで、私も驚いています。でも、オオヤマト古墳群がある、奈

良盆地の東南部あたりですと分かります。そもそも古墳の研究を見ている限り、私は発掘したことはないのですが、例えば奈良盆地において古墳を構成する諸要素が自生的に出てきたとは考えられていない。瀬戸内にある讃岐、吉備とかさらに出雲とか、そういう地域のもつ諸要素があつて、前方後円墳ができるのだと。必ずしも奈良盆地の東南部に、その地域だけから古墳を造るような政治的條件があつて造るという、そういう条件があつてできるということではなさそうです。だから私は古墳の立地というのは、ちょっと別に考える必要があると思います。白石太一郎さんという国立歴史民俗博物館の副館長をされた方とも議論中なのです。

そのように考えると、古墳の位置というのはいったいどういう場所なのかということになります。地域を考える場合も同じで、墳墓がある所、生産する田地がある所、それから首長居館とか居住するところ、そういう三つぐらいを考えて、古墳の立地を考えていかないとダメになるのです。今日の和田さんはおそらく古墳ができる場所に政治勢力があつて、それが造ったという議論はされていないので、私も当然だろうと思います。ですから古墳の秩序に入るといふのは、ヤマト王権が先か古墳を造るのが先かという議論にもなりますが、ヤマト王権の秩序に入ることでしょう。それと前方後円墳をどこに造るのか、中央はともかく、地方においても考えていかななくてはならない。

非常に早い時期の墳丘墓は、九州でもあります。国東半島でしたでしょうか、石塚古墳ですか？その意味を考える必要があります。また、前方後円墳はどのようにしてできたのでしょうか。千葉県

に神門古墳群（ごうぼんぐんぐん）というのがあってそれを材料に考えていました。ところが、奈良からも瀬田遺跡が出てきたわけです。こうした前方後円形の墓から、どのように前方後円墳の秩序を作るかということ。そしてヤマト王権が出来てからも、やはり前方後円墳の秩序に入っていくわけですから、それは非常に大きいことであると思うのです。

佐藤・・

今、吉村さんがおっしゃったのは、必ずしも政治的に強い勢力がある所に古墳群ができるわけではないと。もうちょっと別の場所に奥津城（おくつぎ）としての古墳が営まれることもあるということですね。

吉村・・

そういうことです。例えば、都の場合は王宮、これは歴代遷宮と我々はいつていましたけど、実は宮を移すのではなくて、都を移すから歴代遷都の方が正しいのですけれども、宮だつて厳密に考える必要があります。そもそもヤマト王権がどういうところに王宮を造るかというと、特定の地域に政治的、経済的基盤があつて、そこに宮を造っていくのではないわけです。ヤマト王権自体がそういう特定の狭い地域から離脱しているというか離れているというか、もう少し抽象的な王権ということになると思うのです。都造りというのも、やはり宮はどこに造るかということも研究されています。ですから墓はどこにできるかというのも、妃の出身地域とか幾つかの説があるのですけれども、まだ十全には説明できないです。当時、何故そこに造ったかということを研究していかないといけない。つい先日、今城塚古墳の埴輪公園を見に行きました。継体天皇の真の王陵です。継体は淀川地域の政治勢力とは関係あるかもしれないけれども、あそこその出身ではないのです。それは『日本書紀』、『古事

『記』を見ても越^えないし近江です。ということもありますので、古墳の立地は、なかなか上手くは説明できないと思うのですが。王宮はヤマト王権が成立してから、歴代遷都とか歴代遷宮ついていますように、比較的自由に都を造れるわけです。ですからおそらく新しい王が即位すると、それが新しい都を造るわけですから、墓もそういう発想でいいのではなからうかと最近は思っています。ただ、考古学の中には頑固な人がいますから、五大古墳群はそれぞれの地域の政治勢力が造っているから、そこから大王が出たつていうのです。これはこれでまた別途議論は必要です。肥後国とは直接関係ないように思いますけれども。

佐藤..

継体大王の墓が、大阪の高槻市にある今城塚古墳だと、今、考古学の方はどなたも考えているわけですけれども、継体大王は近江で生まれて越前で育ち、応神天皇の五世孫ということで招かれて、ヤマト王権の大王となり、先代の大王の妹と結婚して迎えられています。ただ都を、ヤマトの国に営むまでに何年もかかって、最終的には奈良盆地東南部に都を置くけれど、亡くなった後の墓は今の大阪の高槻市ということです。和田さん、お願いします。

和田..

多分、古墳というのは生きている間から造り出していると思うのです。だから今の継体大王の話でいいましたら、理屈としては、ちょうどヤマトに入る前に二〇年ぐらいでしょうか、乙訓とか、綴喜^{つづき}の方三か所ぐらい回っています。そういうような時期に築こうと思ったら、高槻に築いていても不思議ではないということです。和田萃さんがおっしゃるみたいに、継体天皇の祖先の墓じゃないかとい

うのが、現在の継体天皇陵に指定されている太田茶臼山古墳じゃないかというようなことをおっしゃっているのですけれども、そういう下地が何かあったら、そこに生きている間に造っていて、それからヤマトに入るといことはあり得ると思います。だから地元の人はどうしても、地元最良で考えますので。そうしたらその後、何で誰も造らないのかという話になりかねませんが、先ほど言いましたように日本では、ぷつんぷつんとみんな切れていて、一基あっただけで、次がないというような土地もいっぱいあります。非常にこう政治的な感じがします。

佐藤..

一方で、例えば地方豪族の前方後円墳群の場合は、埼玉県の埼玉古墳群だとか、あるいは群馬県だと保渡田古墳群の近くに三ツ寺I遺跡という当時の古墳時代の首長居館があったりするので、そういう場合は本拠地に近いところに営んだとしてよろしいでしょうか、吉村さん。

和田..

前期と後期は比較的まだ並ぶのです。中期がめちゃくちゃで、王権の力がすごく強い。

佐藤..

吉村さん、お願いします。

吉村..

今言われたとおりで、群馬県に、三ツ寺I遺跡という新幹線建設に伴って発掘した遺跡があります。そこから一キロか二キロの距離に保渡田古墳群があります。地方ではどこにでも造れるというわけじゃないと思うのです。いわゆる地方豪族レベルだと、その領域というか、支配の及ぶところに居館も造るし、墓も造るということです。地域では古墳をどこに造るのかということで、都出比呂志さんでしたね、京都の向日市あたりでしたかね？ この地域では墓を造るのに、かなりヤマト王権の政

治的な動向に影響されることがあるということでした。近畿地方はそうだと思うのですが、それとヤマト王権の論理とは全然違うと思っているのです。

佐藤.. それはヤマト王権の構造とも関わってくるということですね。

吉村.. そうですね。はい。

佐藤.. わかりました、今の墓としての前方後円墳のある地域と、それを営んだ豪族の拠点との話、それから、生産の場というののも一緒に考える必要があると思います。菊池川沿いの場合ということもある。そういったことについて、亀田さんいかがでしょうか。菊池川沿いの古墳群の様相について。

亀田.. やはり後にも郡衙とか古代豪族とかいる地域とかに古墳とかがあります。実はあまりこの時代の集落は見つかっていないところもあります。ですから、そういう形で考えられるのですけど、先程和田先生がお話しになった水系の話もされたので、ちょっと奥まったところに古墳があるというのは、前期古墳なんかでもそうですので、もう少し広い範囲で考えないといけないのかなと思います。聞いていたところです。

佐藤.. あと、古墳の象徴性みたいなものも気になります。次の首長が前の首長を埋葬して権力を手に入れるということになると、やはり大きい古墳を営んで前の首長の墓は立派に営む。しかも例えば生産地からよく見えるとか、そういうことを考えたくなるのですけれど。和田さんお願いします。

和田.. 昔は、古墳の上で首長権継承儀礼が行われていたという考え方がありました。今はその考え方は成

りたたないと私は思っていますので。やはり、造っている人が自分の権力を一番誇示したいわけですので、生きている間に寿陵（生前墓）として造るとというのが原則だろうと思います。東アジア全体、その可能性が高くて、特に中国なんか明確にそれがわかります。たぶん前方後円墳が造られている間は生前に造っていた可能性ががあります。古墳時代から飛鳥時代に変わるころに改葬という行為が出てきます。あれがちょうど転機になって、天智とか天武は死んでから墓を造っています。そこら辺で入れ替わるのではないかと思っています。

佐藤

福岡県のことですが、磐井の墓は岩戸山古墳で、『筑後国風土記』の逸文を見るとほぼ間違いない。別区があつて、石人・石馬が並んでいるということの間違いないと、ほとんどの方は思っていると思います。あれは磐井が生前に寿陵じゅりようとして造ったということです。今、和田さんのおっしゃったようなことはあるのかなという気がいたしました。この問題について、永山さん、日向、鹿児島、古墳についてはいかがでしょうか。

永山

そうですね。先ほどスライドにもちよつと出しましたがけれども、やはり後の日向の国、今の宮崎県とほぼ重なるところは、それなりに古墳があります。それから大隅国は志布志湾岸にあります。唐仁古墳群という九州で三位ですか、それぐらいの規模の古墳があるのだけど、それ以外のところにはあまりないです。それから隼人というのはいつできたかという次の問題とも関わってくるのですけれども、基本的に大隅国と薩摩国には、横穴墓はないのです。鹿児島県内にはあるのです。鹿児島県内の

志布志市というところ、それから長島町には横穴墓があるのですが、それは肥後国であり、日向国であって、薩摩国や大隅国には横穴墓はないということで、やはり古墳時代の何らかの問題が、そのあと尾を引いているといいましようか、何か関係があつて、次の律令制の時代にも影響を与えているということは確かだろうなと思います。

佐藤..

ありがとうございます。私がちよつと疑問に思っているのは、九州の古墳文化というと、磐井の乱のときの磐井の勢力圏に阿蘇の溶結凝灰岩を用いた石人・石馬が多く分布して、これが磐井が拠つて立つた筑紫国・豊国・肥国に多いということで、それは磐井の勢力範囲、拠つて立つテリトリーを象徴するのではないかといわれていると思います。一方で、筑紫君と肥君は全く同じ立場じゃなくて、肥君の方はむしろヤマト王権と結びつくような立場であつた可能性があると思つています。あるいは北部九州の方でいうと、宗像君もヤマト王権と結んだ可能性があるかと思つていますが、そういうことは古墳文化とか、古墳のあり方に反映するということはないのでしょうか。これは和田さんに、お伺いしてよろしいでしょうか。

和田..

九州の方が書かれているのを見ましても、やつぱりある程度、両者を分けて考えている方が多いと思います。特に肥君のほうがずっと生き残つていくのではないかという立場の人は結構いらつしやるように思いますし、だいたい当たっているのではないかなと思います。ただ、従順ではなかつたと思ひますが・・・。

佐藤.. それは磐井もともとヤマト王権と結んで前方後円墳を造っていたわけですので、それは微妙な、

常に反乱するというような立場ではないと私も思います。

和田.. 先ほど言いましたよね。多分そのせいか、関東北部とか、東北の方にまで九州の石室や横穴や壁画

などがいつていますし、肥後地域と、東北、関東北部にしか分布していないような遺物もありますので、そこを中心にもう少し研究できと思っています。

佐藤.. ぜひ期待したいというか、亀田さんいかがですか。今のようなお話は。

亀田.. 菊池川流域の文化というのは、磐井の乱の後六世紀前葉から前葉だけじゃなくて、その後、石人というのも一部残ります。

佐藤.. 残るのですか。

亀田.. 時期は微妙ではつきりはしないのですけれども、木柑子^{きこうじ}フタツカサン古墳とか高塚古墳は磐井の乱後のものと考えられますし、その後、石屋形とか肥後型石室などの影響が筑後の方へ広がるのはその後ですし、決して菊池川流域というか、筑後の勢力を含めて、やはりずっと勢力があったと思います。ただ肥後国についてですが、先ほどの氷川の野津古墳群のちよっとお話をさせていただいて、その後大野窟^{おおのいわや}古墳という六世紀中葉後半の古墳は後期古墳としては破格の大きさを持っています。その周辺にはその後も勢力が継続しており、肥後国府がどこにあったのかということはあるのですけれども、どちらかというところ。肥の君の勢力に近いところにあるので、その地域がヤマト王権にやつぱり

取り込まれていったと考えられるのです。ただ、北の方の勢力、筑紫君の影響はその後も続くのではないかなと考えているのですけれども・・・。

佐藤・・

筑後国と肥後国が結構近いのではないかというのが、今日のお話の中でもあったと思いましたけれども、これは考古学的にもそういう面が指摘できるということでしょうか。

和田・・

菊池川流域で作られた石棺が筑後の方にも分布しているということですよ。石室とかいろんな古墳文化も密接な関係がありました。石人・石馬も含めてです。

佐藤・・

ちょうど八世紀の初めに筑後国司で赴任した道君^{みちのきみのおびと}首名という、古代の官僚の鏡として『続日本紀』に描かれている官人ですけれども、筑後守と同時に肥後守も兼ねていて、当時は多分、肥後国の方が筑後国より大国だったと思いますけれども、両国の国司を兼ねて、こちらの肥後国では味生池を造って農業生産を推進したという記事まであるわけです。筑後にも溜池をたくさん造って、水利をよくして生産をあげたというようなことが書かれています。一人の国司が筑後・肥後の二つの国を兼ねて統治するというのが八世紀の初めにあったことは面白いと思います。それでは、今の話にまたあとで戻ることもあるかもしれませんが、次に、ヤマト王権による南九州の支配と肥後国・鞠智城との関係についての話に移りたいと思います。これについて永山さん、補足というか、お話をして頂けませんか。

永山・・

先ほど申しましたが、南九州に住む隼人と呼ばれるようになる人たちが貢物を持って行くの

は、六八二年が最初だと考えています。これはやはり、東アジアの大きな情勢の変化の中で始まるのではないかなと思うのです。つまり、白村江の敗戦の後、唐や新羅に対してどう対応するかということがメインであって、諸々の制度改革などをやっていきますけれど、やはり六八〇年前後に唐・新羅戦争が決着したり、あるいは北方の突厥が動きを強めたり、あるいは吐蕃の動きがあったりといったようなことで、唐自体も日本に攻めてこれられないような状態になってきます。それを受けて歴史書の編纂とか、いろんな新しい事業が始まっていくのです。白村江の敗戦後の軍国体制から平時の体制へという、これは吉川真司さんがおっしゃっていることですけれども、そういう大きな変化の中で、南九州に住む人たちを夷狄として朝貢させて、それによって中国に似たような仕組みを作り上げようとしたのです。徳の高い天子が中央で支配を行ない、周辺にいる異民族を朝貢させるといったような仕組みを新しく生み出していったのではないかなという気はしています。そういう中で南九州との本格的な関係が築かれていくのだけれども、政府が律令制を本格化していくということは、つまり夷狄とされていた人たちを戸籍に登録し、公民法していくという流れでもあるわけですから、それに対する抵抗として、先ほど申し上げました覓国使ミコクシの剽劫事件テウキツであったり、あるいは七〇二年、七一三年、それから七二〇年に相次いで南九州で、いわゆる隼人の戦いというのが起こっていくのだろーと思えます。ですから、今のこういう話の流れからみると、白村江の敗戦の後すぐに作られた可能性の高い鞠智城キチというのは、やはり北方に向いてといえましょうか、大陸との関係で築城されたのだろーと思

いますし、そのあとに隼人の問題が登場してきて、隼人との戦いが度々行われるようになります、三野、稻積というのは、特に稻積城というのは、戦いの場所の中にあるわけですから、それを後方支援するものとして、三野城とか鞠智城とかいったようなその北方にある軍事施設というのが重要になってくるのではないかなということです。先ほどもありましたけれども、鞠智城も時期によってその設置目的というか、存続させる目的、意味合いが変わってくる、比重が違ってくるのではないかなと考えています。

佐藤..

これで話題が鞠智城ともだいぶ連携してきたと思います。主には、ヤマト王権が隼人を必要として位置づけるようになるのが、六八〇年代ぐらいということですね。そうすると、ちょうど対外関係でも、大きな変化があったということです。それは同時に『日本書紀』で、隼人が飛鳥で饗宴を受けたりする時期ですよ。吉村さんは今日の話の中で、隼人の統治はもうちょっと早いのではないかなということ言われたので、一つはその議論をしたいと思います。そのあとで六九八年の鞠智城を統治したという記事との関係について、後で議論したいと思います。吉村さん、隼人の登場についてお願いします。

吉村..

隼人という名称とか、隼人がヤマト王権、律令制国家でもいいのですけれども、朝貢する儀式というような形をとったのが天武朝以降であるというのは事実です。その前に朝貢があったかなかったか。ただ、私自身も勉強不足なのですが、かつては確か南山城に堀切古墳群というのがあっ

て、これは隼人の古墳じゃないかという議論がありました。ただ、最近読み直したら必ずしも隼人と限定できないという研究もあるようなので、よくわからないということにもなってきたかと思うのです。ただ、天武朝以降だとすると天武朝以降に、例えば高天原たかまがはらの神々というような観念ができるのが、天武朝以降だというのは分かるのですけども。海幸とか山幸というような神話が天武朝以降に作られて、ずっと教えていけば信じるかもしれませんが、それはちよつとありえないのではないかと思います。つまり、帝紀ていきとか旧辞きゅうじをまとめる段階で、変更は生じるかと思うのですが、原帝紀とか原旧辞というのは、もう少し古く考えた方がいいのではないか。ただあと一つは、これはなんともいえないかもしれませんが、もう少し古く考えた方がいいのではないか。ただあと一つは、これはなんともいえないかもしれませんが、亡くなった吉田孝さんが言っていたことです。ワカタケルというのが、稲荷山古墳出土の鉄剣に実名を名乗っていたということがわかりました。その名のワカタケルのタケルをどう考えるかです。元は日本童男ヤマトノオグナ、小碓尊オウサスですけれども、ヤマトタケルと雄略天皇とは比較的似ているのです。例えば、オグナを名乗るとするのも雄略とヤマトタケル。それからタケルという名称なのですけれども、すでにワカタケルというのがいて、ヤマトノオグナがクマソタケルと戦ってタケルという名前をもらうというような話を、果たして作るのかどうか。つまり、ワカタケルという大王がいて、そのタケルの名称が、その後に夷狄の人物から献じられてタケルを名のというのが、ありえるかどうかですよね。ヤマトノオグナが、おそらく新嘗の祭りに女装して食事し、クマソタケルを酒に酔わして夜殺すわけです。そういうような話が果たしてワカタケルという実名をもつ段階で話を作

るかどうかの問題です。それが古いと一概に言えないかもしれませんが、天武朝以降だというのはいかがでしょう。朝貢の儀礼が整うのは、天武朝以降でも構わないのですけれど。そういう話から見ると、私はもう少し古い時期にできてもおかしくないのではないかと思うのです。

神話の世界の話もけっこう難しくて、なぜ九州の高千穂に降りたか説明しろといってもなかなか難しい。これは天孫降臨という北方神話の話と、今日は吾田の岬がでてきましたけれども、吾田という場で女性に会います。ここに南方系の神話が合併されて出てきます。そういう北方系 南方系の話はもう少し早く日本に入ってきてもおかしくないわけです。そういう意味からいって、堀切古墳群の評価は別にしても、もう少し早くてもおかしくないと考えています。『日本書紀』をどう見るかということとは、けっこう難しいとも思います。そういう意味で、大化前代に想定しておかしくないのではありません。また、蝦夷は少なくとも神話には登場しないわけです。少なくともワカタケルは治天下を名乗っています。治天下というのは、天の下を治めるということです。中国の治天下の中に倭国が入っているのですが、中国の治天下の中に入っている倭国でも治天下意識を持つ、そうすると、どうしてもやはり朝鮮半島に対する蕃国に対する政治力、それから、当時は蝦夷か、隼人の名があるかどうかは別として、日本列島の内部にも夷狄というものがないと「治天下」は名乗れないのではなからうか、という考え方です。

佐藤..

はい、ありがとうございます。『日本書紀』にみられる神代の巻の神話の中に海幸山幸の話があっ

て、その海幸の方が隼人の祖先にあたるという記事がありますので、そういった神話の伝承が、もうちょっと遡るのではないかというのが、吉村さんの隼人の登場の考えです。これは、吉村さんの場合も隼人を朝貢させるという形で位置づけるのは七世紀後半でもいいということなので、そう違わないのかもしれないですけど、ただ、その起源をどう考えるかという点では、ちょっと永山さんと違うのでしょうか。永山さん、いかがですか。

永山…

京都の京田辺の大住おおすみつていう地名がありまして、住居の住の大住です。そこは奈良時代には隼人計帳ケイチヨウというものが存在して隼人が住んでいたということは明らかなのです。これについては、以前その大住の地に地下式横穴があるということで、一度報告されたことがあります。隼人の関係だという話になったのですけれど、現在ではあれは地下式横穴ではないという話と横穴であるという話があるのです。先ほど申し上げましたように、隼人の居住地に横穴は存在しないのです。ということで、もう一つポイントになるのは、南九州の人たちと、ヤマトの関係は多分絶え間なくあったのだと思います。その関係の質的な変化があるのが先ほどおっしゃったように天武朝であるという事は確かだろうと思います。それとあとワカタケルの問題については、もう三〇年近く前ですが、『宮崎県史』を編纂している際に、講演会が開催されて、そこに笹山晴生先生が来られ、ワカタケルがあるとすれば元のタケルがいるはずだ、“ワカ”ではないタケルがいるはずだと言われたのです。それはヤマトタケルであって、というようなお話をされたことがありました。九州に来ることはありえると思うの

ですけれども、それが熊襲という場所を征服するといひましようか、そこに攻め込んでくるというところとがいつ頃まで遡れる話なのだろうかというのが、私もまだ未だにはつきりできないところなのですけれど。私の考えでは、隼人というのは、用字がもう「はやぶさのひと」とほぼ一つです。万葉集に
一か所だけ早人というのが出てくるのですが、これは使い方まで決まった状態で使われ始めている言葉ではないかなと考えています。それに、対して熊襲はいろんな表記がありますので、隼人よりも熊襲の方が古い存在であるということは言えるかと思うのですけれど。その熊襲というのが球磨郡くまと曾於郡そおの連称れんしやうなのかどうかといったようなことまで含めて、これは考古学的なその地域の文化の在り方とかも関わって、今までもいろんな人が検討しているのですが、なかなか実態がよくわかっていないと思います。答えにならない答えですけれども、要は南九州の人たちというか、鹿児島県にも異質化が進むという話がありましたけれども、やはり畿内の物とかは入ってはくるのです。何らかの繋がりには、ずっとあるということはあるかと思ひます。

佐藤・・

はい、ありがとうございます。課題がどんどん広がっていきまして、いろいろなことを研究しないではいけななということが、身にしてみました。少し話を戻して、永山さんが、六八〇年代ぐらひに隼人が朝貢という形でとらえられ、隼人の位置づけが中央政府にとって重要になつてくるとされました。それは対外関係の変化も起きたちようどその時期に、そうなのではないかと。白村江の戦ひが六六三年にあつた後、唐と新羅が対立関係になるので、唐・新羅が日本列島に攻めてくるというこ

とはなくなります。それが一旦ひと段落するのが、七〇年代。そして八〇年代にはかなり落ち着くということかと思います。それと六九八年の鞠智城と大野城と基肄城を繕治したということに結びつくのだと思うのですが・・・。今の永山さんの考えについて、亀田さん、鞠智城を発掘されているお立場でいかがでしょうか。それによって鞠智城の位置づけも少しシフトするのではないかというのが、永山さんのご意見なのですから・・・。

亀田・・

すごく難しい問題で答えられないのですけれども。最初に丁寧の説明しなきゃいけなかったのですが、確かに鞠智城のⅡ期は遺物も多く、また八角形建物とかも登場して、これが何かというのは議論があるのですが、信仰というか、そういうのであれば、初期の段階のころとは変わってきますし、圧倒的に遺物が多いのです。修繕記事があつて大々的に開発されたと思われます。今のところは、失われた遺構を復元するのは難しいのですけれど、菊鹿盆地の方に向いていた建物が多かったのが、奥に向かって展開していきますし、長い建物も顕著になってくると思います。ただ、初期にも、兵舎として復元している建物のように長い建物がありますので、私個人としてはⅠ期から官衙的な機能はあっていると思います。遺構配置図を見るとかなり機能が増しているって、長者原地区に建物がたくさんできますし、外郭線も当初だけじゃなくて整備されていったのではないかと漠然と考えています。

佐藤・・

繕治というのは、全般的な機能の拡充と思ってよろしいでしょうかね。考古学的には。

亀田・・

現在の遺構を確認する限りはそう考えています。ただ、実は大型礎石建物の下は調査をしていませ

るので、その結果次第で位置づけが変わると思うのですが、今のところはそう考えていいと思います。

佐藤..

もし、永山さんが言われたように考えると、私は鞠智城だけではなくて、本当は大野城や基肄城もその南九州をどう扱うかということと連携してくるかなというように思いますけれど。それから八世紀の初めにかけて隼人との戦いが律令国家の大きな課題になってくるので、大宰師の同伴旅人も、暑い時に苦しい戦いをしたという記事もありますので、全般として律令国家は全力で支援しなくては行けないということだったと思うのですよね、永山さん。

永山..

考古の専門ではないので、はつきりしたことはぜひ教えていただきたい面もあるのですけれど。やはり七世紀末ぐらいというのは、最近進んでいます日向国府の調査でも長舎型というやつではあるのですけれども、その辺りに国府が姿を現しましたというようなことで、やはり七世紀末から八世紀初頭というのは、大宰府はどうなのですかね？ 大宰府もやはりその時期に変わるのですよ。ですから、これって極端に言う九州管内全域でそういうことをやっているけれども、一方でその大野城、基肄城、鞠智城についてはそれが記事に残っているといったような考え方は出来ないのかなという気はしないではないです。

佐藤..

これはもう律令国家の確立を目指して、いろいろなところで地方官衙の建設だとかもあったかもしれないですね、おっしゃるように。ただ、気になるのは七世紀半ばぐらいで評は置くので、その評の役所の段階とそのあとの段階で地方官衙が拡充する。国府の場合も、初期国府とか言われる遺跡が、

七世紀代の末ぐらいから営まれて、かつては八世紀前半とっていたのが、初期国府っていうのもちよつと遡らせようという考え方になってきつたと思いますので、それも含めて位置づける必要があるかもしれません。今日のテーマは肥後・鞠智城なのですが、肥後国府の発掘調査で、七世紀末とというのは何か変化があるのでしょうか。亀田さん、分かる範囲でお願い致します。

亀田.. 肥後国府についてはよく分かってないところがあつて、教えていただきたいところなのですけれど。最近、熊本駅周辺で発掘調査が進んでいるのは、八世紀後半とか中頃ぐらい以降なのです。八世紀前半というか、七世紀末から八世紀前半というのは、実は非常に熊本でも遺跡が少なく、土器の編年ができてないというように考えていまして、本当はちよつと注目すべきところはあるのでしょうか。れど難しい問題です。ただ、陣内廃寺が熊本市の南側にありますし、その近いところに国府があつて欲しいなというところです。

佐藤.. 陣内廃寺は、七世紀代の寺院と見ていい訳ですよ。

亀田.. 立願寺廃寺の瓦とさほど変わらない時期だと考えていますので。

佐藤.. ですからこれ鞠智城だけじゃなくて、もうちよつと肥後の国全体の地方官衙とか、寺院とか、豪族の居館とかみtainなことが見えてくると、また違ってくるかなということでしょうか。その時代の集落については、全然わかってないということでしょうかね。

亀田.. 実は菊池川流域の集落の消長表にも七世紀と書いてあるのですけれども、実は土器がちよつと含ま

れているところが多くて、実際明確な遺構ってというのが非常に難しいです。菊池川下流域で行くと、玉名市の柳町遺跡とか上小田宮の前遺跡という遺跡で、掘立柱建物等はあるのですけれど、大規模というにはまだ様相がちよっとわかってないところがあります。七世紀代の遺構というのが、すごく少ないです。八世紀後半以降、耕地面積が増えて開墾が増えるのです。上の台地にやはり集落がたくさん営まれるので、それくらいの時期以降は非常にわかるのですけれど、なかなか難しいところだと考えています。

佐藤..

ありがとうございます。今日の永山さんの話で、三野城、稲積城いなづみがそれぞれ日向とか大隅からの国府に近いという話があったので、国府近くの山城の評価はどうなるのかなということは、気になりました。位置についてもほかの説もあると思うので、今後の検討とさせていただきますと思います。時間が押しましたので、今日のシンポジウムを踏まえて、お一方ずつ、今後こういうことが課題になるのではないかとのお話をさせていただけるとありがたいと思います。亀田さんから順番にお願いしたいと思います。亀田さんお願いします。

亀田..

今日は大変勉強させていただきました。和田先生のお話も非常に大きな話で肥後地域をもう少し積極的に評価していいのではないかとのご助言もいただいたので、肥後地域が与えた影響とかも含めて、広い視野でみていきたいと思います。文献については不勉強で、そういった面で永山先生とかを含めて、勉強させていただきました。吉村先生にいたってはかなり大きな視野で辺要国っていうこと

も指摘して頂いて、そういった面でも考えていけたらと思っております。今日は勉強させていただき
ました。ありがとうございました。

佐藤.. それでは、和田さんお願いします。

和田.. 今回初めて山城について勉強させていただいて、大変勉強になりました。地図を見ていましたら有
明海沿岸の、おつぼ山から、帯隈山、そして高良山に、杷木神籠石、ちよつと入っていますけれど、
それから女山があつて、女山から鞠智城までちよつと離れているようにみえるのですけれど。国道
四四三号線が通っているのです、それ通つたら、そんなに遠くないような気がして。ぐるつと、有明海
の北側のところを囲っている曲線の南の端に鞠智城があるような感じがして、そこに包み込まれた世
界、に対応しているようにも見えると思えました。海の方こうも含めて感じました。積極的にこうい
うシンポジウムをしながら進めていただいたら、各地の見本になつて、すごく素晴らしいと思います
ので、よろしくお願いします。

佐藤.. ありがとうございます。それでは永山さん。

永山.. 初めてこの鞠智城のシンポジウムに参加させていただきありがとうございました。三〇年近く前に
八角形建物が出た時の現地説明会に参りまして、あと木簡が出た時、木簡を見せていただきに上がつ
て、まさかこういう場でお話をさせていただくことになるうとは思いませんでしたけれど。改め
て、私は南九州の隼人のことをメインにやっているのですけれど日向とか肥後という、隣接した国の

動向というのは、きわめて密接に関わっているのだということを痛感致しました。もちろん大宰府管内の動きというのとも密接に関わるのだろうなということで、その辺も含めて今後も調べていきたいと思っています。

佐藤.. ありがとうございます。では吉村さん。

吉村.. 最後にになりましたけど、辺要という概念は律令法的な法理だと思っています。だから、そういう視点から整理することが必要だろうと思うのですけれど。隼人の問題というのは、僕は夷狄だと思っていますが、これはまた礼の問題と関連します。私自身の古代史研究を振り返ってみますと、七世紀後半の律令制研究というのを主に考えてきたのですけれども、大隅清陽さんが礼制の秩序というのをかなり強調されています。中国では律令格式が出るときには、儀注ぎしゅうという礼制が出ているのです。それで日本のことを考える場合に、律令だけで考えたなら不十分であることを大隅さんが言っています。もっとも中国の儀注ぎしゅうみたいのを導入することは日本にはなかったと思うのですけれども、ただ礼制の導入というのを考えてきますと、推古朝に朝令を改めるとか、葬礼があります。前方後円墳は敏達朝びだつで終わってですね。用明天皇から方墳になっていきますけれども、葬礼をかえるということが非常に大きい。それから冠位十二階。冠位制があります。十七条憲法では「礼を基本とせよ」というのが出てくるのです。仏教思想だけではなく、礼の位置付けも重要です。当時の隋、それから唐。遣隋使、遣唐使を通じて、儀注ぎしゅうが入ってきたかどうかは現在議論があるのですけれど。推古朝における冠位十二

階とか朝令を改めるとか、それから葬礼の整備が行われます。孝徳朝になってから、冠位もそうですが、それから大化薄葬令たいかのはくそうれいも、孝徳朝にでています。王宮の儀礼というのも出てきますし、それから愚俗ぐぞくの改廃かいはいという、これも礼制と関係があるのです。ですから、辺要は律令で説明しようと思つてできないことはないのですけども、夷狄いてきの問題もおそらく礼の秩序と関係してくると思うのです。そうすると改めて律令の中だけで、辺要にしても隼人とか蝦夷を考える場合には律令法だけではなくて礼制との関係で考えていくと、この推古朝ぐらいで何か問題になってくるだろうというように私は思うのです。そうした時に筑紫大宰つくしだいざいができますし、それより前に那津官家なのつのみやけとか、そういうのが出てきます。

また、江田船山古墳からワカタケルに關係する銀錯銘大刀ができています。当然、中央の方に情報としては、南九州という概念はないにしても、南の方にどういう人たちがいるか、南島かどうかというのは当然、情報として伝わっているのではないか。そういう夷狄いてき観念というものが礼制との関係で入ってきて、そこで問題になってくるのではないか、というぐらいいも考えた方がむしろいいのではないか。七世紀後半から八世紀にかけては律令中心に考えてそれほど問題ないのですが、日本でも格式が整うのは平安に入ってからなので、やはりずれてくる。平安の頃になって、礼制の問題もいろいろ問題になってくるといように議論されています。ですから、むしろ律令より以前の礼制の秩序の中で隼人の問題、あるいは蝦夷の問題を考えたらいいのではないかと思います。ただ、儀礼ですか

ら、やはり律令的な儀礼との関係があるので天武朝に出てくる。それほどおかしくはないというように思うのですが、ただそれ以前に中国的な礼制が入ってきた時に、これは体系化されませんけれども、何らかの対応があってもおかしくないのではないかと。そういうことで、私自身もそういう礼制を重視しなくちゃいけないというのは、この一、二年で考えています。改めてそこから隼人・蝦夷問題を解いたら解けるのかどうかということです。ただ、日本の場合は律令時代に礼制が組み込まれますので、儀礼の体系が一部できて、そこで隼人が儀式に参列させられます。そういう問題も律令プラス礼制の問題で考えていけば、また新たな視点が出てくるのかな、と現在思っています。後期高齢者になったのだけど、次から次へ課題が出てくるので、年は取れないというのが正直なところです。

佐藤..

ただ今の、礼制の礼は礼儀の礼であります。律令というのは、人民を支配するための道具としての法律だけでも、礼というのはむしろ為政者が自らを律するために必要な中国的・儒教的な概念であって、それは為政者にとっては非常に大事なものだというのが、中国でのあり方だと思います。今の吉村さんの最後のお話にありましたように、鞠智城の話から出発して、日本古代史さらに日本史全体にとつての、大きな課題も出てきたように思いました。今日は時間になりましたので、終えさせていただきますが、また今後チャンスがあれば、こういう形でまた皆さんと一緒にいろいろ鞠智城をもとにした、いろいろな課題に取り組んでいければと思っております。本日はどうもありがとうございます。